

第6回

朝鮮人強制動員被害のはなし 名前のない遺骨

朝鮮人強制動員被害のはなし

太平洋戦争前の戦前から戦後にかけて、忠別川流域の東川町内であったといわれる朝鮮人強制労働の実態解明調査を行っている「江卸発電所・忠別川遊水池・朝鮮人強制連行・動員の歴史を掘る会」（近藤伸生代表）は昨年10月、掘る会メンバー6人と、東川町から企画総務課長も同行して慶尚南道に調査へ行きました。

「疫病で亡くなったと聞きました。棺桶の遺体を7、8人で担いで運んできたその人たちは、私の知らない言葉をしやべっていました。住職に言われ、その人たちの真つ黒に汚れていた手を、釜で沸かした湯を盥（たらい）に注ぎ、一人ずつ洗ってあげました。

寒かったので、みんな震えていて、ある人は本堂のローソクの炎に手をかざし、暖を取っていました。その手の指が（凍傷からか）ローソクの色と同じくらい真つ白だったことを今でもはっきりと覚えています。本当に気の毒でね、かわいそうでね…、涙が出ましたよ」。

今年5月末、志比内（東神楽町）にある聞名寺の88歳になる先代の坊守り



さんたちから話を聞かせてもらった。

聞名寺には1944（昭和19）年10月15日付けの新聞紙と、布に包まれた無縁仏（骨箱）がある。実はその遺骨が、江卸発電所建設に従事した朝鮮人労働者のものであるという。

古い記憶をゆつくりとたどるように、その日のことが詳しく語られた。

終戦前年の晩秋、日本人親方に先導された朝鮮人の一団が夕闇に身を隠すようにしながら江卸から棺桶を担いでやって来た。先代の住職が応対し、その遺体を本堂に寝かせ読経した後に墓地に運び、茶毘（だび）に伏した。その間、坊守りさんらは湯を沸かし、彼らの手を洗った、という。

当時、そんな出来事が何度かあったと記憶している。その日から66年間、無縁仏として本堂の隅に安置されてきたのがその骨箱なのだ。

許しを得て、包んでいる布を解き、釘で閉されていた箱のふたを開けて中を見せてもらった。中には白い紙が敷かれてあり、その中に真つ白な遺骨があった。

東川町で亡くなった朝鮮人強制動員労働者の存在は、これまでの調査で韓国の体験者のお爺さんたちからも東川の方たちからも聞いていた。



工事中の事故死によるもの、病死によるもの、原因が特定できないものなど。古い町史の中に、その当時「発疹（ほっしん）チフス」が流行し、死人が出た、という記述も残っている。

しかし、いったいどのくらいの人数がどんな状況で亡くなったのか、そしてその後どこに葬られたのか、その実態はまだまだまったく明らかになっていない。

遺骨はなにも語りはしない。しかし六十余年ぶりに日の光にさらされた白い骨片の静謐（せいいつ）さが、逆に

見る者の心にさまざまな思いを想起させる。

「もしこの遺骨が自分の身内であったなら、いや、もしこれが自分自身だっただとしたら…」家族はいたのだろうか、子どもはいたのだろうか？
「寒い異国の地で、飢え、過酷な労働に耐え、どれほど故郷に帰りたいか、ことだろう」「病に苦しみ、どんなに辛かったことだろう…」。

残念なことに寺に位牌などは残されておらず、過去帳にも記載はないという。坊守りさんたちは「できることならここで安置し続けるのではなく、故郷に返してあげたい」と願っているが、厚労省いわく、現状では『身元が判らない遺骨に関しては返還の対象になっていない』との見解らしい。

われわれに出来る事はいったいなんだろう？ ご遺骨に手を合わせながら、何度も考えた。

江卸発電所・忠別川遊水池・朝鮮人強制連行・動員の歴史を掘る会

代表 近藤伸生